

オピニオン&フォーラム

「ゆるし」への一歩

ローマ法王 来日

インタビュー

死刑で復讐しても  
心からは癒えない  
負の連鎖を断って

ローマ・カトリック教会のフランシスコ法王が23日に来日する。掲げたテーマは「すべてのいのちを守るため」。焦点の一つが、死刑制度だ。61年前に来日し、教誨師として死刑囚との対話を続けてきたハビエル・ガラルダ神父(88)は、キリスト教徒が少ない日本においても、法王の言葉は届くはずだという。なぜか。

――受刑者の心と向き合う教誨師を長く務めてきました。

「1994年から東京の府中刑務所で、主にスペイン語や英語を話す外国人受刑者の教誨師を務めています。2000年からは小菅の東京拘置所で、日本人の死刑囚とも話をしています」

――死刑囚とどんな話をするのですか。

「彼らに家族や友人が面会に来ることはめったにありません。人と話す機会がほとんどないので、月1回、1人30分の面会を楽しみにしています。話すのは、神様について、哲学について……『死んでからどうなりますか』と聞かれることもあります。とても深い話をします」

――みな、罪を悔い改めているのでしょうか。

「どんな罪を犯したのか、私から聞くことはしません。でも話をしていると、心がきれいになってきているのを感じます。彼らは私と話すときは聖書とノートを持ってきて、一生懸命、神様の言葉を記しています。たくさん本を読み、とてもよく考えているから、鋭い質問も多い。私が学ぶことも多くあります。彼らは悔い改め、改心していると感じます」

――執行に立ち会うことも？

「執行がある時は前の晩に連絡があります。10年ほど前のことですが、朝、執行前にミサをしました。彼はとてもしつかりして、聖書を読み、5分ほど話をしました。『ありがとう』と言います。みなさんゆるしてへんが、と言っているから、ドアの向こうに行きました。その後、遺体と対面し、簡単な葬儀をしました」

――日本は先進国では数少ない死刑制度のある国です。多くの国民が、制度を支持しています。

「難しい問題です。もちろん、彼らは悪いことをしたから死刑を宣告されたのでしょう。でもなぜ、国に命を奪われなければならないのでしょうか。死刑囚は話もできず、ずっと一人だから、すべ

Javier Garralda  
神父 ハビエル・ガラルダさん

1931年、スペイン生まれ。宣教師として来日し、上智大学教授を務める。著書に「自己愛とエゴイズム」など。2018年、瑞宝小綬章受章。



江口和貴撮影

のにならないほど豊かになりました。一方で格差も目立ちます。『お金がすべて』という価値観を感じます。お金を稼げる人は偉い。そうじゃない人は見下されても仕方が無い。人を心でではなく、顔面で判断してしまう」

――変わっていない部分もありませんか。

「行儀正しき、社会秩序を守る。そこ。すごくよいことだと思えます。ただ組織や社会のルールを大事にするあまり、個人を見ず、はみ出た人に厳しい。規則は人間のためにあるものであって、人間が規則のためにあるのではない」

――日本のキリスト教徒はごくわずかです。日本人の宗教心についてどう見えていますか。

「日本ではキリスト教は土着化していません。加えて、1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件は、大きな転換点の一つだったと思います。当時私が接していた学生たちは、宗教に抵抗感を持つようになりました。今は宗教というより、心の平安や生きがいといった『宗教心』のようなものを求めている人が出てきたと思います。ヨガや瞑想がはやってい

るのもその一環でしょう」

――でも厳密に言えば、これらは『自分』の心の平安や生きがいを求めているものであって、少し自己中心的です。もっと他人のことを思い、自分より弱い人、貧しい人が助かるようにと考えるのはもったいないと思いませんか」

――若者の「宗教離れ」は、先進国共通の傾向では。